様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 8 月 30 日現在

機関番号：34448
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23890233
研究課題名（和文）　腎移植レシピエントにおける妊娠・出産の体験

研究課題名（英文）　Experience of pregnancy and childbirth in renal transplant recipients

研究代表者
吉川　有葵（YOSHIKAWA YUKI）
森ノ宮医療大学・保健医療学部・助教
研究者番号：20614085

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、腎移植後に妊娠・出産を経験したレシピエントの体験を質的に明らかにすることである。生体腎移植施行後、妊娠・出産し、現在育児中にある女性３名のライフヒストリーを構成した。移植前は子どもを授かることをあきらめていたレシピエントは、移植によって、子どもを産み、育てることができたことに感謝し、生きがいを感じていた。一方、多忙な子育てにより健康管理が不十分となり、腎臓が悪くなることへの不安や恐怖を抱いていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The goal of this study is to understand the experience of pregnancy and childbearing for kidney transplant recipients. We performed the life history of three mothers who became pregnant and delivered their children after receiving kidney transplantation. Recipients who gave up on the possibility of motherhood before they received kidney transplantation feel strongly their purpose is the birth and raising of the children. On the other hand they suffer from anxiety as the stress of raising children leads them to poor health maintenance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総　計	700,000	210,000	910,000

研究分野：　医歯薬学
科研費の分科・細目：生涯発達看護学
キーワード：臓器移植、腎移植、妊娠、出産、看護、レシピエント

１．研究開始当初の背景

わが国において 2010 年 7 月 17 日、改正臓器移植に関する法律が全面施行された。本人の意思が不明でも家族の承諾があれば臓器提供が可能となり、ますます臓器移植が増えることが予測される。移植医療の著しい進歩に相まって、臓器移植患者（レシピエント）の妊娠・出産も増加しており、今までに、腎臓、肝臓、肝臓—腎臓、膵臓—腎臓、心臓、心臓—肺、肺の移植後の妊娠成功例が報告さ

れている（Vincent T.A, et al，2004）。

結婚、妊娠、出産は女性のライフサイクルにとって重要な意義があり、臓器移植を受けた女性にとってもそれは同様であると考える。健全な女性にとって妊娠は安全とみなされているが、臓器移植後のレシピエントの妊娠は、免疫抑制剤による胎児発育への影響、妊娠による移植臓器機能への影響という問題があり、さまざまなリスクを伴うことが述べられている（今中ら, 2000）（梅田ら, 1994）（東間，2005）。腎移植を受けたレシピエントにおいて、移植医療に関する医師および看護師の認知は、移植医療に対する満足度に影響を与えることが報告されている（野副，2003）。看護師が腎移植後の妊娠・出産についての専門的知識を持ち、レシピエントの心情を理解してケアすることは腎移植後に妊娠・出産するレシピエントの Quality Of Life（以下 QOL）を高めることにつながると推察される。しかしながら、腎移植後の妊娠・出産に関する看護支援についての既存の研究は乏しく、レシピエントの心理的側面に焦点を当てた研究は国内外ともに行われていないのが現状である。腎移植後、肝移植後のレシピエントともに拒絶反応や合併症の恐れを抱えており（林, 1997）（習田ら, 2008）、臓器移植後に妊娠・出産するレシピエントが抱く恐れや不安は計り知れない。臓器移植後のレシピエントがより安全に安心して妊娠・出産ができるよう支援する必要があり、臓器移植後に妊娠・出産を経験したレシピエントの体験と心情の解明が期待される。

２．研究の目的

本研究では、我が国における腎移植後に妊娠・出産を経験したレシピエントの体験を質的に明らかにする。臓器移植後の妊娠・出産に対する看護援助モデルを開発するための基礎研究を行う。

３．研究の方法

(1) 研究参加者の選定

研究参加者の選定は、まず臓器移植施行施設に研究協力を打診した。身体的・心理的に研究協力に支障がないと医師が判断する腎移植後に妊娠・出産を経験したレシピエントを紹介してもらい、研究者がレシピエントへ研究依頼書をもとに研究の概要を説明し、研究への協力に同意を得られた人を研究参加者とした。

(2)データ収集期間

平成 23 年 10 月～平成 24 年 3 月

(3)データ収集方法

生体腎移植施行後、妊娠・出産し、現在育児中にある女性 3 名を対象に半構造的面接を行い、得られたデータから逐語録を作成した。

(4)分析方法

作成した逐語録を繰り返し読み全体像を把握した。次に、逐語録を＜クロノロジカルな時間＞＜ライフサイクル的な時間＞＜歴史的な時間＞＜現在という時間＞という時間を示す言葉に注目して読み、まとまりごとに出来事としてとらえ、研究参加者のライフヒストリーを構成した。出来事とその時の感情に注目し、腎移植、妊娠および出産が研究参加者にとってどのように意味づけられているかに着目して、3 名のライフヒストリーを比較検討した。

(5)倫理的配慮

倫理的配慮として研究参加者に研究概要、プライバシーの保護、自由意思の尊重について説明し、研究参加への同意を得た。なお本

研究は、研究者の所属機関の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

４．研究成果

(1)結果

研究参加者の年齢は 34～42 歳、移植後から初産までは 4.67±2.08 年であった。

腎移植後に妊娠・出産を経験したレシピエントのライフヒストリーには、【疾患罹患から腎移植に至るまで】【腎移植後から妊娠までの時期】【妊娠から出産までの時期】【出産後から現在までの時期】【現在という時間】の 5 つの時期が存在していた。下記に一例を示す。なお、わかりにくい表現は（　）で言葉を補った。

【疾患罹患から腎移植に至るまで】においては、疾患罹患初期の頃は「もうずっと透析なのだと思っていました。」「（腎移植は）もう夢のまた夢という感じのことだと思ってました。」と腎移植という治療についての知識がないことが目立った。腎移植を決意した理由は「赤ちゃんが産みたい」「透析が終わるのなら」という思いで、妊娠への関心は【疾患罹患から腎移植に至るまで】の時期から存在していた。

【腎移植後から妊娠までの時期】においては、「（移植後の妊娠は）2 年は空けましょって言ってて…。」と忠実に医師の指示を守り、医師から妊娠の許可が出ることを心待ちにしていた。

【妊娠から出産までの時期】においては、妊娠がわかった時、「涙がポロポロ出てきて、よかった、ここまで頑張ってきて。」「妊娠が分かった後の検査薬をずっと置いていたぐらいうれしかったです。」と格別な喜びであることを表現した。腎機能の悪化や胎児への薬剤の影響に対する不安は、胎児が大きくなるとともに「きっと大丈夫」という自信に変わっていた。

【出産後から現在までの時期】においては、「夫婦 2 人でも楽しかったけれども、倍楽しいから、やはり楽しいことがもっと増えたから…」と子どもがいる幸福をかみしめていた。一方で、「いつ透析に戻るかというのは常に不安です。」「いつおしっこ出なくなるかと、夢もすごく見るし…」と自分が腎移植レシピエントであるがゆえの気がかりを抱えていた。さらに、「子どもがなるようなもの（感染症）になるから、やはり薬のせいにしたらいけないだろうけれども、免疫抑制しているというのが大きいのか…。」「子育てをしているとしんどいから、やはり腎機能は悪くなったり、たまに今も風邪をひいたりはしやすいし、どうしても子どもがもらうと絶対にもらうし…。」と出産後の度重なる身体の不調に悩まされていた。それらは、「自分のことは後回しになります。」と子ども中心の生活で不十分な健康管理であることが原因ととらえていた。さらに、子どもは母親の入院によってストレスを抱え、子どもが心配だから、子どものために入院は避けたいこと、入院しなければならないときは必要とする医療的サポートを柔軟に受けられるようにしてほしいことを語った。一人で子育てすることは大変で、「そういう（恵まれた）環境があっての子育てなので…」と語り、家族や友人に支えられている自分を感じていた。

【現在という時間】においては、「一番素晴らしい体験をさせてもらったと思っています。」「人生の中で、私の中では一番幸せな瞬間だったし、今、一番幸せな時をあの子に与えてもらっているとすごく思っています。」と妊娠・出産をとらえ、移植したことで子どもを産み、育てることができたことに感謝し、生きがいを感じていた。さらに「普

通の、移植も病気もしていなくて産んだのとまた違う感覚だと思います。感謝の塊と言うか、子どもが…。」「自分の人生がこれでよかった、自分を信じてきてよかった」と移植をして子どもを授かったことは、今までの苦しい治療を含めて自分の人生を受け入れることにつながっていた。

(2)考察

移植前は子どもを授かることをあきらめ、辛く苦しい治療を乗り越えてきたレシピエントは、移植によって、子どもを産み、育てることができたことに感謝し、生きがいを感じていた。さらには、自分自身のこれまでの人生を受容することにつながっていた。これは、「普通の母親とは違う感覚」とレシピエントが表現しているように、腎移植レシピエントにとって妊娠・出産とは特別な意味をもっているといえる。

一方で、多忙な子育てにより健康管理が不十分となり、腎臓が悪くなることへの不安や恐怖を抱いていた。子どものために健康でありたいと思う気持ちが、レシピエント自身の健康管理行動につながるよう支援していく必要があると考える。

また、妊娠・出産の体験は【妊娠から出産までの時期】に限定せず、【疾患罹患から腎移植に至るまで】の時期から継続した過程で表現された。妊娠が可能な年齢の女性が腎移植を選択した際には、腎移植に至るまでの段階において妊娠・出産に対する情報提供を行い、レシピエントや配偶者とともに家族計画について考えることが必要である。腎移植後に妊娠・出産したレシピエントの体験を理解し、各時期に応じたサポートを行っていくことが重要と考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 1 件）

①Yuki Yoshikawa, Tae Kawakubo, Junji Uchida, Report on the experience and mental status of a patient who experienced pregnancy after kidney transplantation, 12TH Congress of the Asian Society Transplantation. September 27. 2011, Korea.

〔図書〕（計 1 件）

①城ヶ端初子，他、久美株式会社、看護理論家からの贈りもの、2013、71～75

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
吉川　有葵（YOSHIKAWA YUKI）
森ノ宮医療大学・保健医療学部・助教
研究者番号：20614085